

暮れの騒動

八日市場と歩く

匝瑳探訪

-67-

ここで紹介する「八日市場」は、市内の住所表記でいうところの「匝瑳市八日市場イ」に限っています。

現在の10町内のうち1670年以前に存在が確認できるのは、田町・本町(1900年以降に東本町、西本町となる)・横町・出羽町(1839年ごろから上出羽町、下出羽町となる)・門前町(見徳寺門前で明治の初めに万町となる)・新田町(明治の初めに仲町となる)の6町内でした。

1662年の家数は315軒で、市域はもとより近隣村々のうちでも最も大きい村

で、そのため町内ごとに分けられ生活していました。

1604年に天王宮(現・八重垣神社)の御輿みこしが造られた記録があり、祇園祭もこのころには催されていたであろうし、1713年ごろには各町内への御輿みこし渡御も行われたようです。

それまで在地で生産消費されていた木綿が、1770年ごろから「八日市場木綿」として江戸で流通するようになって町場化が進み、町内での商いをする家も増えたようです。

1807年の記録では、村で

商家と思われる屋号の付くものが50余軒を数えました。

村では江戸時代に2度の大火に見舞われました。1840年2月の火事は、田町坂下から見徳寺門前まで延焼し、土蔵40が焼け落ちるほどで

した。それから復興して20年ほどした1863年12月、八日市場村は「暮れの騒動」に巻き込まれました。

この動きは世直しや貧民救済を掲げた「真忠組」とよばれる140人余の隊員が商家や豪農などから金品を強奪し、それらを生活に困っている人たちに配る動きでした。市域からは20人ほどが組に加わり、福善寺に支部が置かれました。その行動範囲は、現在の茂原市、東金市から九十九里地域一帯にかけてで、八日市場村では最初に金を要求され、村役人や商人らが100両を差し出しました。このほか、大寺、飯塚、内山、春海村などへも浪士があらわれ金品を出させられました。こうして調達された金は、村役人などを通じて25か村の生活困窮者に配られ、八日市場村へも50両が届けられました。

こうした動きに対し、幕府は翌年1月中旬に近隣の佐倉藩や多古藩に出兵を命じ、真忠組は鎮圧されました。暮れから正月にかけて1か月余の騒動に村びとが巻き込まれたのでした。

問 秘書課 広報広聴班

☎ 73・0080



真忠組の支部が置かれた福善寺